

## はじめに

誰も自らの身体を所有しない

——アントニオ・ヴィエイラ [Veira 1951: 352]

二〇〇八年の秋、あるいは年末だったか、私は取り憑かれたように自宅のパソコンの画面に食いついていた。本書を執筆している時点ではもう閲覧できない（おそらくは削除された）ブログにおいて紹介されていたのは、ポルトガルで創案された、とあるサッカーのトレーニングの方法論であった。

あまりに不可思議で、しかしだからこそ思考させてやまない。私は一読でこの方法論に魅了され、そのブログの著者であるサッカー指導者の村松尚登氏に連絡をとって会いに行き、また関連する書籍をポルトガルとスペインから取り寄せて読み耽った。読めば読むほど、不可思議さと、ある種の怪しさと、難解さとともに、救いのような感覚すら覚え始めた。それが不可思議で、怪しく、難解だったのは、私がスポーツ科学を専攻していたわけでもなければ、この方法論の内部で次々と援用される複雑系科学の概念や神経科学の知見に明るくないせいもあるだろう。この理論が、スポーツ科学以外の学問領域の概念や知見を、ときには飛躍と評しうるほどに参照しているがために、距離を持つて眺めるべきであるかのようにみえたせいもあるだろう（おそらく、その印象は誤っていないのかもしれない）。しかし、その一方、この方法論に救いのようなものを覚えたのは、この方法論がどうあっても決して優れているとは評価しえないサッカー選手だった私をどこかで肯定してくれるようにも読めた

からだ。この方法論は、サッカーという集団スポーツにおいて、チームでなすプレーの本質を、それゆえトレーニングの根幹を、技術の習得でもなければフィジカル能力の向上にでもなく、戦術を、あるいはプレースタイルを習得することに求めていた。たとえ技術的に拙くとも、フィジカルが脆弱であっても、態度変化し、流動するグラウンドの環境のなかで妥当な心的表象を形成し、適切な行爲を選択し、そうしてチームプレーを実践し、プレースタイルを実現すること。チームとして一つのプレースタイルを実現し、それによってチームが一つの凝集的な存在になること。それこそがサッカーの根源であって、そしてトレーニングというプロセスの根源である、とその方法論は述べた。学校の部活動の短い期間しかプレー経験がなく、加えて中途半端な選手でしかなかったにもかかわらず、チームのためにになかできないかと常に考えていたものの、無力感からそのまま辞めてしまった私に、救いを与えてくれるように思ったのは、あまりに勝手すぎる読み方だったかもしれない。しかし、この方法論の核心にある部分は、サッカーの本質が華美で創造的な個人のプレーにあるといった、当時私の周りを支配していた見方から解放させてくれるように思えたのだ。

本書は、「戦術的ピリオダイゼーション (Periodização Tática、以下PT)」と呼ばれるこのサッカーのトレーニング方法論とその応用実践から、その理論の主たる焦点であるところの、プレースタイルを実現すること、あるいはより直截に言えば、チームで一つのプレースタイルを実践することとはなにか。さらには、一つのサッカーチームが構成されるとはいかなるプロセスなのか、そのときのチームとはいったいかなる様態なのか、チームを構成すること、チームになることとはいったいかなることなのかという問いを、人類学の論脈に位置付けて考察するものである。本書が検討する事例は、その意味で、まずもってこの方法論それ自体であり、そして私が実質的なアシスタントコーチとして参与観察を行ったポルトガル共和国ポルト市に本拠を置く小さな地域クラブの育成年代のチームにおけるその具体的な応用実践である。それゆえ本書は決して新しい戦術を紹介するわけでもなく、あるいは古今東西の戦術へと議論を広げるわけでもなく、あまりに広大で膨大

なサッカーのトレーニング理論や思想を渉猟して比較考量するわけでもない（そのためには、十数の言語に精通し、いわばサッカー界の井筒俊彦のようになる必要があるだろう！）。あるいは、かつて本邦でなされたような「知識人」によるサッカー批評を展開するわけでもない。むしろ、この理論の言説とその特定の応用実践例とともに、人類学がずっと向き合ってきたのと同じ資格にある事例として、すなわちフィールドの人びとが人類学者に与えてくれる民族誌的事例として、人類学の知の内部における諸問題に應える潜在的な意義を有する事例として扱われる。本書が扱う具体的なチームの事例において、取り組まれていたサッカーの戦術は、それ自体としてはマリノフスキーのいうような「平凡なもの」かもしれない（とくにサッカーに詳しい人にとってはそうみえるだろう）。しかし、この理論の言説と応用実践を考察することは、人類学において一定の意義があると本書は考えている。本書の事例が当事者たちのサッカーの世界の内部ではいかに日常的なものであったとしても、人類学を実践する本書は、サッカー研究としてではなく、人類学研究として、それに意義を見出しているのである。

とはいえ、これまでサッカーのトレーニングが人類学的考察の俎上に乗せられたことはなかった。そこで本書は、この方法論の理論的含意を踏まえ、人類学におけるアフエクト論や習得論の研究史にこれを位置付けて考察を展開する。本書は、一つのチームになることとはいかなることかというこの民族誌的事例が与えてくる問い、PTの理論的言説と応用実践が与える問いが、人類学におけるアフエクトや習得をめぐる諸問題に應えるための素材として示唆的であり、翻って、その素材を人類学において理解するにはアフエクトと習得という二つの視点が必要であると考ええる。どういった点で示唆的なのか。あるいは、これらのうちのどういった研究蓄積と論点に着眼し、それらをPTとの接点とするのか。本書の内容に先立ってその接点の概要を示しておこう。

PTはヴィトル・フラデーというポルトガルの元大学教員にしてサッカー指導者である人物が創案し、その大学での指導学生たちが中心となって理論的に展開してきたという経緯を辿っている。創案者フラデーは論文をわずか数本書いたにすぎず（その内容を精査すれば、実質的には一本と数えてもよいかもしれない）、むしろその

教え子たちが、フラーデの思想に内在する萌芽的な要素をフラーデに代わって敷衍することで理論が形作られてきたといってもよい。その展開のなかで、P Tの理論的言説において、しばしば心的表象がブレースタイルを習得する鍵とされている（詳細は第2章にて論及する）。本書の民族誌的現在である二〇一三―一四年に、心的表象は、神経科学、とくにアントニオ・ダマシオによる一般向けの書籍にもとづいて概念化されるに至った。これを踏まえて本書は、むしろフラーデの思想の出発点に立ち返り、そこから再出発し、彼の思想をスピノザ哲学における心身並行論と関連づけて再構成を施して敷衍することを試みる。必ずしもこの理論においてスピノザ哲学は、確かに一部をなしているとはいえるが、前景にある要素ではない。しかしその教え子たちが心的表象をめぐる創案者の思想を神経科学の知見にもとづいて敷衍したように、本書もまた――私はフラーデの直接の指導学生ではないがその薫陶を受けた――その理論的展開のなかにあつて、P Tを今度はスピノザ哲学の助けによって再展開する。このような手続きは、一見するとところ迂回路のように、あるいは過剰なもののようにみえるかもしれない。しかしこの手続きはまずもってこの方法論の形成史――プラトンがソクラテスに対してしたように、フラーデの言葉を教え子たちが敷衍するという過程――に沿ったものである。この手続きは、P Tの理論的構成がその根源から明確になる効果をもたらし、さらにはP Tと人類学との接点もまた、明確にさせてくれる。その接点の一つが、アフエクト論である。

二つめの接点は、この理論にもとづくサッカーのトレーニングの実践がブレースタイルの習得を目的としていることに直接に関わる。素朴に考えて、トレーニングの実践は習得の過程、とりわけP Tにおいてはブレースタイルの習得の過程である。しかし、ここでもやはり人類学の研究蓄積と交差させるためにいくつかの確認が必要になる。一つは、人類学における習得論の多くは学習者側に中心的な視点を置いてきた。本書はむしろ、学習の機会を準備し、与える側としての指導者に視点を置く。これは私がフィールドにおいて、あるチームの実質的なアシスタントコーチとして参与観察を行ったという事情、そしてP T自体が指導の方法論として定立していると

いう事情に即している。本書では、従来の人類学における習得論が主たる焦点を置いてきた、学習者と指導者の関係を考慮しながらも、これまで顧みられてこなかった指導者——あるいは模範的实践者、師匠、熟練者——の位置に着眼して、P Tの習得論としての特徴を描き出すことを試みたい。

さらに、人類学においてこれら二つの問題系は決して交錯するものとはみなされず、その交錯のありようは明示的な論点とされてこなかった。本書がP Tの理論とその応用実践を民族誌的事例としてとりあげて、プレーズ・タイルのもとでチームプレーを実現すること、つまり、一つのチームが構成されるプロセスを問うこと、そのときのチームの様態を問うことは、この交錯のなかに意義を見出すことになるだろう。その交錯する地点においてP Tの理論的言説と応用実践が人類学になにを教えてくれるのか。これについても検討を試みる。

本書は、P Tの理論的言説と応用実践がこれらの問題系に応える事例であると考え、その論脈に位置付けて考察する。その意味で本書をいくつかの観点から読むことは可能だろう。P Tというサッカーのトレーニング方法論に関心のある読者は、その理論と具体的な応用実践の記述を中心に（こうした関心のもとでは第2章から読んでもよいだろう）。サッカーに限らずスポーツに関心のある方は、トレーニング実践の例を微細に描いた記録として（第4章と第5章がその記録に該当する）。アフェクトや習得に関心のある読者はその諸問題に應える一つの試みとして（第1章では人類学において関連する議論をできる限り広く検討している）読んでもいいかもしれない。そうした関心——あるいは私の想定を越えた読み方も含めて——に本書がなにかしら役立つのだとすれば、それに勝る喜びはない。